郷土はんのう

第４３号

内出の出世稲荷神社

目　　次

◆飯能の街中を歩いて……関根貴志……2
◆原市場伝説探訪―湯ノ花周辺の温泉伝説について―……波田尚大……6
◆南高麗歴史散歩……例会の報告……8

飯能の街中を歩いて

関根　貴志

２０２３年度の活動では飯能の街中や飯能河原の周辺を実際に見て歩き、そこで眼にしたものを端緒として、清水会長をはじめ会員の方から様々な話を聴きました。その内容を振り返ってみたいと思います。紙幅の都合で高麗横町を主に取り上げます。この頁と次の頁に昭和15年～25年頃の高麗横町の地図を掲載します。

高麗横町

高麗横町のあらましについては本誌三十四号に「高麗横町とおすわさま（清水澄一・現会長）」として説明があるので、そちらも参照してください。

高麗横町は今の大通りの丁字路（仲町交差点）から第一小学校裏交差点の少し先にある鶴舞地蔵までを南北に通る区間です。

表記に「丁」でなく「町」を用いるのは、かつて横手や吾野谷津の方から出てくる人からとすると、町へ行ってくるというのはこの高麗横町だったからということです。

鶴舞地蔵

鶴舞地蔵が御座す土地は字鶴舞ではなく字堤堀になるのですが、これを説くにはまず鶴舞という地名の起源に触れる必要があります。

鶴舞の場所はおおよそ現在のカインズホームや鈴音のあたりで、かつては鶴の越冬地でした。陽だまりで餌が多く、条件の好い場所だったようです。

ある時、親子の鶴が居たのですが、川越藩が徳川家に正月のお吸い物のために献上するということで鶴を探しており、親の方を捕まえて連れて行ってしまったということがありました。子の鶴は親を探して酷く鳴いていたと言います。

それで、可哀そうだということで、鶴舞地蔵を建立し、高麗と秩父の追分に安置したとの話です。隣に安置されている馬頭観音も鶴のためだと言います。

道沿いの北側に沢田植木屋さんがあって、そこの親父さんが、地べたに置いといたんじゃ可哀そうだということで、今のような形にブロックを積んで祀り込んだということです。また道を挟んで南向かいの中野米屋さんが講元になって、毎年12月1日に祭をやっていたとのことで、戦後も昭和三十年代初め頃までは続いていたとのことです。

そうやって昔から地域の人に大事にされてきたので、古いお地蔵さんなのだけれども、顔がしっかりしている（残っている）ということです。

馬の休憩所

かつては天覧山の東谷津からこの交差点まで湧き水が流れてきていました。水は豊かで、堀は幅六尺もありました。流れはここで南に向きを変え、ずっと先の井上酒造の処で東に曲がって行きました。ちなみに高麗横町の井上酒造から南側は水路が無い分、道が狭かったということです。

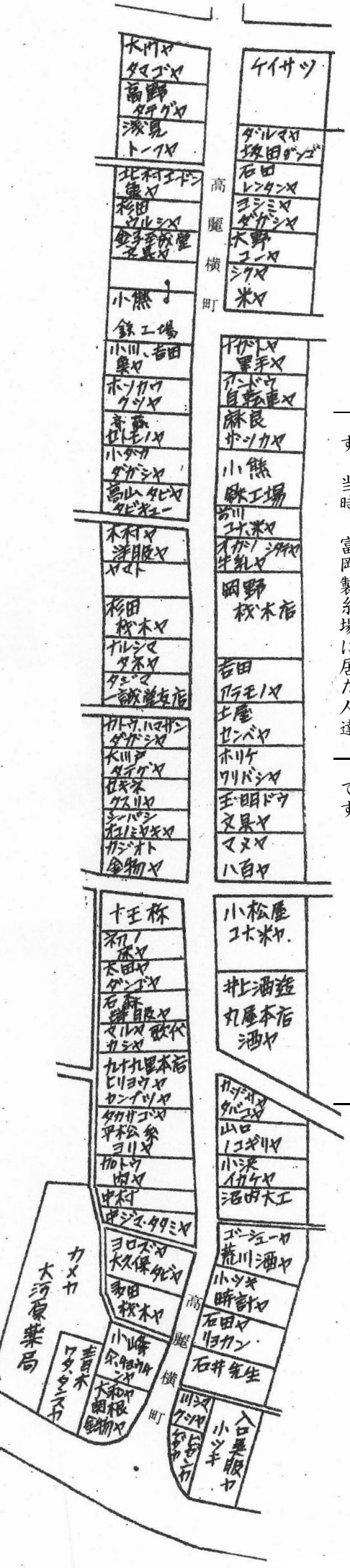
この交差点一帯の土地は森住さんの所有で、縄市が始まった頃から馬方とその馬の休憩所をしており、酒も飲ませたとのことです。

鶴舞地蔵

馬方達は名栗や原市場の方から、材木や炭を馬に積んでやって来ると、ここへ馬を連れてきて、湧き水を利用して馬を洗ったり、餌をくれたり、また西側に広がる桐畑で馬を休ませたと言います。

運んできた荷を日用品などに換えた馬方達は、夕方になると名栗や原市場の方へ帰って行きました。その頃には馬方はだいたい一杯飲んでいるので、荷物と一緒に荷台へ乗って寝てしまうのですが、馬は道を覚えているので、自分でちゃんと家まで帰ったという話をよく聞かされたということです。

近所では伊勢根さんが蹄鉄を直したりしていて（伊勢根馬靴屋）、昭和の30年代までやっていました。器用で、馬であろうと牛であろうと対応できたので、かなり繁盛していたといいます。



養蚕と製糸

かつての聖天宮の最も近いところに蚕の繭の乾燥場がありました。生繭は十日ほどで発蛾してしまうため、保存のために熱で乾燥を行う必要があるためで、乾燥には吾野や名栗谷津からの炭を用いていました。

乾燥場の道向かいに「西村トージヤ」とあります。実際には「トージヤ」でなく「ドージャ」と呼ぶもので、漢字では「導車」と書き、「ドウシャ」が訛って「ドージャ」になったものらしいです。ここでは製糸工場で使われる歯車を木で製造していたそうです。

南へ少し行くと屑繭屋が2軒ありました。また横町を南へずっと行くと成島種屋がありました。「種」とは蚕の卵のことです。富岡製糸場に居た人が、今で言う出向のような形で派遣されて来たといいます。当時、富岡製糸場に居た人達はあちこちへ行かされたという話です。

武蔵織物

今の法要殿の駐車場のあたりに、かつては飯能屋という料理屋がありましたが昭和10年に焼けてしまい、昭和15年頃にそのあたりに織物工場が作られました。ところが表向きは機屋ということですが、実際は軍の発注する機関銃の銃身を作っていたということです。

この関係で土壌が油に汚染され、今でも周辺の土地の井戸は油だらけで使えないそうです。

小沢鉞力屋

当会理事の小澤さんの祖父の、一番弟子にあたる秀さんという方がやっていました。諏訪八幡神社や出世稲荷神社、三座稲荷神社の銅板屋根もこの人の手になるそうです。

長門屋

この横川さん―畑屋の遠い親戚でもある―は、もともと戦艦長門の乗組員をやっていたのですが、横須賀の資産家の娘さんと駆け落ちし（田中順三氏は詩「旗艦」で「凛として美しい奥さんがいた」と書いています）、その後飯能にやってきて、軍手や靴下を作ったりしていたといいます。

終戦後も、海軍記念日（5月27日）には白い海軍の制服を着て、椅子へ座り、日がな一日何もしないで煙草を吸っていたということで有名でした。

飯能学校

今の九十九里本店の場所（以前の警察の道向かい）は、かつては聖天小能家の敷地で、明治6年7月に能仁寺から丹生神社の拝殿を移築し、飯能学校が開校しました。

これは前年８月の学制頒布から一年足らずという早さでした。

聖天小能家は代々「志摩」の名を世襲し、聖天加能社の神主を務めていました。諏訪八幡神社、能仁寺の丹生社、神久山の神明社、中山の聖天社を兼務したこともあったといいます。九代目の吉治は伊勢長島の出身で、敷地内で寺子屋を主宰し、教え子は五百人を超えました。飯能学校開校の前年の明治５年に没しました。十代目の吉敬（秩父屋九代目小能俊三の弟で養子に入った）が継承して飯能学校を開校し、明治26年には聖天宮の敷地を提供し、第一飯能尋常小学校と改称・移転しました。

明治初年の地図

聖天宮のあった場所には、昭和12年に奉安殿が建てられました。跡地が今でも柵で囲われているのは、国の土地なので、入れないようにとのことらしいです。

出世稲荷

飯能第一小学校前の地名は内出と言われており、ここに出世稲荷と呼ばれる小さな社が祀られています（表紙の写真）。

いつ頃誰によって祀られたのか、長いあいだ手掛かりがありませんでした。しかし平成30年３月に勧請の証書・神璽・誓紙の控え等が見つかりました。証書には明和六年（１７６９年）に伏見稲荷から勧請されたことが記されており、このことから、このお稲荷様が約二五〇年にわたって地域の人に信仰されてきたことがわかりました。

移住してきた人たち

話を聴いたり調べていると、他所からこの地へ移住してきた家が多く、往時はだんだんと人が増えるに連れ活気も増していっただろうと想像されます。高山足袋屋は、まだこの辺りが野っ原だった頃に最初に住んだ人だそうです。

高橋ストアーの前身である高橋八百屋も、初代の常八氏は明治期に静岡から出稼ぎに来て八百屋を開業したのですが、当時は「人家もチラリホラリ。そこで常八さんは大八車を引いては日高や名栗方面まで、汗水流しながら売って歩いた」といいます。（文化新聞 昭和51年４月16日号）

杉田漆屋は、東照宮の漆職人の次男が当地へ来て居着いたもの。

小松屋（四代目が田中順三氏）は、初代の田中愛次郎氏が水富村笹井（現狭山市）の名主の長男で、飯能戦争の際に官軍を飯能に道案内し、そのまま移住したらしいです。これについては、正しくは次男であった、案内を差配したのは父の栄五郎氏だった、という話もあります。

丸屋醸造（井上酒造）の初代は、元は新潟から五十嵐酒造に働きに出てきた人でしたが、独立してこの地で造り酒屋を始めました。始めたものの、井戸の水が少ないので近隣の家から水をもらっていたとのことです。赤田喜美男さんの写真集（『ふるさとの思い出写真集』）に、天秤で水を運んでいる写真が掲載されています。塀は井上酒造のもので、奥に小松屋が見えます。

大正末期の写真

小沢鋳掛屋は、当会理事の小澤さんの実家で、川越から来飯したとのことです。

荒川酒屋（江州屋）は名の通り近江からやってきました。

入口呉服店（小槻家。現入口電業）も、近江からの販売拠点として江戸期に飯能に店を構えたのが始まりらしいです。同じ近江でも江州屋とは違う地域らしいです。

逆に、鍛冶音の横丁から先は、ずっと昔、明治前からの人がほとんどだそうです。

玉明堂

当会顧問の坂口和子さんの写真集（『写真集 飯能市の昭和史』）に掲載の写真は玉明堂の前から北を写したものだそうです（昔は玉明堂前にプラタナスの樹があった）。

昭和41年の高麗横町

天覧山通り

昭和30年頃に、元飯能町長・元衆議院議員で飯能繊維工業の社長でもある平岡良蔵氏と、当時の観光協会の会長で後の西武産院院長である石井照雄氏とが中心になって、高麗横町を「天覧山通り」という名称に改めようとしました。

これは、東京から平岡氏の工場へ客が来る際に「高麗横町」だと高麗の方へ行ってしまうので不都合だということが発端のようです。

その計画のために、銀座通りから街灯更新で不要になった街灯三十基を譲り受け、柱に「天覧山通り」と名前を入れて設置しました。

ところが遂に定着しませんでした。昔からの名前を一企業のために変えるのはおかしいし、もともと天覧山駅からニコニコ池のところまで桜並木の道路があり、地元ではそれが天覧山通りということになっていました。それを平岡氏がレース工場を建てるために道を崩して自分の敷地にしてしまいました。

第一小学校の裏側の畑には昔からの遺跡があり、子供たちが矢尻やなんかを拾っては遊んでいたのですが、それを調査や記録もしないで壊してしまうということも起きました。

田中順三氏の詩「駅」には次のように書かれています。（駅とは天覧山駅のことです）

駅から天覧山まで
丘の下を通る桜の道があり
遠足の子供たちや
花見客でにぎわった
（中略）
縄文遺跡の丘の下を通る
のどかな花の道も
途中から切断され
個人の家の庭に取り込まれて
しまった

そんな背景があり、宮本町や二丁目の人は反対の立場だったということです。

久下地蔵

東谷津からは、鶴舞地蔵方面へ行くのとは別の水路が流れていました。これは観音寺の墓地の脇を南進し、内出と町並の境を通り、十王堂の西側で南へ曲がり、その先は畑屋の前を通り、こんぱるの前で南東へ曲がり、雨だれ荘方面へ続いていました。

雨だれ荘へ続く道の途中の茶畑の脇に、お地蔵様がありました。今の花寿司の辺りになりますが、区画整理で移転し、今は公園内に「久下地蔵尊」として祀られています。雨ざらしで酷い状態だったのを、中里家で上屋を作り、附近の人々で維持してきたものです。

久下地蔵

堂内の額には「飯能戦争当時にはあったと言われます」とありますが、別の話では、飯能戦争の時に久下か入子の辺りで戦死した若い侍が居て、その母親らしき人が明治20年頃に飯能へ来て、息子を供養するためにこの地蔵を建てたのだ、という話も伝わっています。

参考資料

・飯能人物誌編さん委員会，『飯能人物誌』，昭和45年
・飯能第一国民学校編，『飯能郷土史』，昭和19年
・新井清壽，『飯能戦争』，飯能郷土史研究会，昭和63年
・田中順三，『高麗横町』，平成13年

原市場伝説探訪
―湯ノ花周辺の温泉伝説について―

波田　尚大

飯能市立博物館で開催した特別展「原市場村秘史―受け継がれる記録と記憶―」において、中藤上郷の湯ノ花に伝わる、温泉がかつて湧出し冷水に変化したという伝説のある巨岩を紹介した。同展の関連事業の一つとして、現地見学会「原市場伝説探訪」を開催し、参加者の方々とその巨岩を目指しながら原市場地区の様々な歴史・文化を解説した。本稿では湯ノ花周辺の温泉伝説に関する資料を紹介し、同地の温泉伝説の諸相を明らかにすることを目的とする。

湯ノ花周辺の温泉伝説に関する最も古い記録は『新編武蔵風土記稿』の南村内、中沢(澤)組の熊野権現を祀る湯権現社の記事中に登場する。

「土人云う往古此所より温泉湧出せしが、今は冷水少しく出るのみ、此邊に住る農民汲みて呑水とす、近き頃までも此邊の畑より、湯の花出しと云、」

中沢組は湯ノ花の西及び北側に位置する。湯ノ花については同資料中、中藤村上郷・中藤村中郷・中藤村下郷の小名に名称のみ記載がある。中沢の湯権現社(熊野権現社とも)で、かつて温泉が湧出していて、編さんされた江戸後期には既に冷水となっており、近隣の住民が飲用水としていたらしい。また、その前には周辺の畑から温泉成分が凝固した湯の花が出てきたという。

画像 中藤上郷湯ノ花の温泉にまつわる伝説が語り伝えられてきた巨岩

次に古い記録が、山村民俗の会によって発行された雑誌『あしなか』の第16輯、いわゆる「奥武蔵」の様々な説話を収録した「ものがたり奥武蔵」の中に湯ノ花の地名の起源と温泉の冷水化の理由を語る話が掲載されている。著者は神山弘で、アジア・太平洋戦争が開戦する前から様々な伝説などの聞き書きを行っていた。神山は同書のはしがきで「これは奥武蔵の山々に住む人々が、語りつたえてきた炉辺俚譚集なのである」と記しているが、当時の伝説を記録した数少ない資料である。

「湯ノ花は、昔温泉が湧出していて湯ノ花がとれたからこの名があるといい、かつて一人の猟師がこの湯の湧出口で、血のついた手を洗ったら以後湯が出なくなって冷泉になったという。冷泉前温泉の伝説がここにもある。」

湯ノ花という地名について、かつて温泉が湧出していて湯の花が採取できたことからその名がついたという由来が語られている。また、猟師が温泉で血を洗ってしまったことで湯ではなく冷泉になっ

たという変化の理由についても記載されている。

神山の「ものがたり奥武蔵」は、昭和57(１９８２)年に『ものがたり奥武蔵』として書籍化されており、あとがきによれば「今の時代にそぐわない文章をなおす程度にとどめておいたが、当時他の雑誌などに発表したものを加えたり、新しい現地の写真を追加」したという。特別展図録の14頁に掲載しているのが書籍版の内容であるが、『あしなか』版とその内容は大きく異なっている。例えば、坂石の芳延から南・中沢の飛村へ至るキワダ坂(現在はＳＫマテリアル吾野鉱業所によって消失しているが、当館蔵『吾野村全図』で道を確認可能)の一軒家に湯ノ権現が祀ってあり、そこで温泉が湧出していたこと、またそこから流れ出た温泉の湯の花の溜まった場所が湯ノ花であったこと、猟師が血を洗ったことで湯ノ権現が怒り、上州の伊香保へ飛んでいったということ、この説話にならい、湯ノ権現が上を「飛」んだので飛村と命名されたことが記されている。

この変化が、アジア・太平洋戦争前の調査の誤りを訂正したことによって生じたのか、その後の追加調査によって得られた新情報なのか、現在では確認できない。記述の内容については、『あしなか』版よりも詳細が明らかになっている点が指摘できる。

戦後になり、こうした湯ノ花周辺の温泉伝説は、飯能の観光開発の中で注目を浴びることになる。飯能・日高地域の地方紙である昭和30(１９５５)年７月11日号の『文化新聞』で、当時の飯能市長町田右之亮が[奥武蔵鉱泉開業]を目指し、湯ノ花などの「湯」地名の場所で温泉の調査を行う意思があったことが報道されている。その背中を押した理由の一つは、当時の古老たちが語った、イオウの湯の花を採取したことがあるという話によるものだった。実際に調査を行ったかどうかは不明だが、町田の目指した[奥武蔵鉱泉開業]には至らなかった。

その後、昭和38(１９６３)年に高度経済成長によって失われつつある民俗文化の緊急調査が中藤中郷を中心に、その周辺についても行われた。特別展図録の40頁にその概要を記しているが、当館で所蔵しているその調査票(正確にはその写し)には「中藤鉱泉跡 明治時代の鉱泉場跡」、その成果をまとめた『埼玉の民俗』(昭和41(１９６６)年刊行)には「中藤鉱泉跡 明治時代湯治場として一時栄えた」という記述がある。中藤鉱泉跡がこれまで紹介してきた湯ノ花周辺の温泉伝説に関係するものなのか、そうでないのかは現状では明らかでない。

昭和61(１９８６)年、『飯能市史』資料編11(地名・姓氏編)が発行され、湯ノ花及び隣の小西という小字名の解説が掲載されている。

「小西 屋号オキの家があって、おくまん様(熊野社)の小詞がその裏手にある。おくまん様と湯ノ花の伝説があり、鉄砲打が熊をうったので、おくまん様が怒られ、湯は出なくなってしまった。と言うことである。」

「湯ノ花 山麓に小集落があり、南むきの広い平(ヒラ)がある。平を昇って、東に曲る小径を少しゆくと大岩があり、ぽたぽたと水が落ちている。その滴る水が白い湯ノ花になっていたのだそうだが、いま湯ノ花は見られない。」

また、特別展開催にあたり、筆者は令和３(２０２１)年12月９日に湯ノ花及び隣接する田ナリに於て聞き書き調査を行った。

「そこの家の裏山にね、でかい岩があるんですよ。そこに始終絶えたことのない水が溜まってる訳。だからそれがね、昔はお湯だったんだって。そのお湯が、話だからあれだけど、その猟師がね、猟にきて、何を洗ったんだか。そしたら他行っちゃった、そういう話もね。家なんかでもね、何代前かわからないんだけど、そこにお湯を貰いに行った、ていう話だけは聞いたことがある。何で貰いに行ったのかはわからないんだけど。」(小字田ナリ在住)

「昔はね、そういう話なんだけど。お湯みたいのが出てたって話しするんだよな。お袋(明治40(１９０７)年生)はね、昔は勢いよく出てたんだけどな、湯の花みたいな、水が湧いてたと、お湯が沸いてたと言ってたんだけどな。」(小字湯ノ花在住)

以上で紹介したように、江戸後期から現在に至るまでの湯ノ花周辺の温泉伝説の内、「温泉がかつて湧出していたが、後に冷水になってしまった」という伝説の要素は江戸後期から現在に至るまで確認

できる。他の要素についても検討の余地があるだろう。このような温泉にまつわる伝説は当地のみに存在するものでもなく、全国的に報告の多い伝説である。こうした話がどのように伝播し語り継がれてきたのかは、今後の課題とする。

（飯能市立博物館学芸員）

南高麗歴史散歩　例会の報告

十月十四日（土）に元副会長の小見山進さんと理事の久下文男さんに「南高麗歴史散歩」と題した講演を行っていただきました。

薬師堂の鰐絵、旧道の石仏と石橋、秋葉神社の由来、クリーンセンター前の新道開通のきっかけなど、様々な逸話・秘話を紹介していただきました。

◎令和五年度事業報告

▽総会

・四月三十日(日)

講演会

「補遺：埼玉県下で何番目？

―飯能町の上水道施設―」

講師　波田　尚大氏

（飯能市立博物館学芸員）

▽例会

・六月十日(土)

「飯能河原周辺の史跡を歩く」

（現地見学会）

・八月二十七日(日)

「飯能河原周辺の史跡を歩く・

事後学習会」

・十月十四日(土)

「南高麗歴史散歩」

語り手　小見山 進氏

久下 文男氏

（当会前副会長、理事）

・十二月九日(土)

「飯能の街中を歩く」

（現地見学会）

・二月十七日(土)

「飯能の街中を歩く・

事後学習会」

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日　四十三号

◎令和六年度事業計画

▽総会

・四月二十日(土)

講演会

「飯能の武人・

丹党中山氏を再考する」

講師　高澤　等氏

（日本家紋研究会会長、

当会副会長）

▽例会

・六月十五日(土)

見学会　大宮方面

・八月二十四日(土)

「底抜け屋台について」

・十月十八日(金)

バス見学会　瑞穂町方面

・十二月十四日(土)

「鎌倉街道上道について」

・二月十五日(土)

見学会　国分寺方面

▽郷土はんのう発行

・三月三十一日　四四号

訃報

内野博司様（下畑）

大野悦子様（坂石町分）

謹んでご冥福を

お祈り申し上げます。

◎新会員

加藤　寛之氏(双柳)

▽インターネットでの交流および情報公開について

・SNS(Facebook)に飯能郷土史研究会のグループを作りました。

興味のある方はご参加ください。(https://www.facebook.com/groups/1379468322825755)

・これまで発行した「郷土はんのう」について、インターネットで見られるようにしました。ぜひご覧ください。(https://ghosts.xrea.jp/kyoudo_hannou/)

Facebook

郷土はんのう

編集後記　今年は街中の興味深い話をたくさん聴くことができたのですが、どれを採り上げるかの取捨選択については苦労しました。

また例会と日程が被り参加できなかった博物館の特別展関連現地見学会「原市場伝説探訪」について掘り下げる論考を、主催の波田学芸員に寄稿いただきました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。いつか伝説の地を訪れてみたいと思います。（関根）

郷土はんのう　第四十三号
発行日　令和六年三月三十一日
発行所　飯能郷土史研究会
〒350-0227 埼玉県坂戸市仲町一―二五
電話　〇四九―二八一―一四四〇（関根方）
題字　大野亮弘
印刷所　プリントパック